

A. J. Brown

スペインの
庭師

スペインの庭師

スペインの庭師

昭和32年6月20日 第1版刊行

¥ 280

地方価 ¥ 290

譯者 竹内道之助
たけうち みちのすけ

刊行者 竹内富子

印刷者 堀内文治郎

発行所 東京都千代田区株 三笠書房
神田神保町2ノ20 会社

電話九段 36504・7483 振替東京 22096

© Printed in Japan

堀内印刷・徳住製本

スペインの庭師

第一章

パリからの夜汽車の旅には、ひどくうんざりさせられた。スペインの國境ポルト・ボウの乗換驛まで腹のたつほど延着して、四十分もおくれたうえに、赤帽がぐずだつたので、かれらはバルセローナから出る朝の接續列車に乗りそこねたのである。コスタ・ブラーベの輕便鐵道にがたごとゆられて目的地へ向ううち、午後五時ちかくなると、疲勞がはなはだしく、旅のよごれも目だつてきた。人手の足りないのと施設の不備のために、領事はそのつど惱まされたが、氣分もうつとうしくなつてきていた。座席のすみにきちんと腰かけたまま、彼は小さな息子のほうへ、心配そうに眉をしかめてみせた。子供はあたたかく着ぶくれして、ほこりやニンニクや、むつとする田舎くさい匂いの立ちこめた、細長い雜然たる客車の、向いがわの木の座席にかけたまま、さつきからやさしい眼で、おずおずと彼の顔色をうかがっている。領事は、この一時間にもう三度も、おなじ質問をくりかえした。

「大丈夫かい、ニコラス？」

「大丈夫ですよ、お父さま」

がつたんごとんと跳ねる機關車が、最後にもういちど人を小ばかにしたように、目の廻るよ

うなカーヴを切つて、かれらをどさりと揺さぶり、かん高い汽笛を鳴らしながら、サン・ホルヘのさびれた驛へはいつて行つた。領事は膝かけと二つの旅行鞆をそのままにして、ニコラスの手をとると、プラットホームへ下りたつた。それは赤い土埃りが一寸もつめた荒涼たる一片の細長い地面にすぎず、まわりにずらりと棕櫚を植えてあつたが、それすら風にいためつけられて、びつこの馬のようにしよんぼりしている。はじめ彼は、誰も迎えに來ていないと思つて、眉をくもらせたが、やがて目をかがやかせた。驛の入口のところに、洗濯ですこし縮んではいるが、小ざつぱりしたリンネルの服に蝶ネクタイをしめ、黄いろい麥藁帽をかぶつた一人の青年が立つていた。その傍らに、ラジエーター・キャップに小さなアメリカの國旗を描いたグレーの自動車がとまつている。青年は二人の旅客の姿を目にすると、還轉手を從えて、神經質にせかせかとすみでた。

「ハリントン・ブランドさまで？　よくおいでになりました。朝の列車だとばかり思つてお待ちしていたのです。わたくし、領事館のアルヴィン・デッカーです」彼は還轉手の方をふり向いた。それは色の淺黒い、頑丈なからだつきのスペイン人で、黒のアルパカの上衣に、デニムのズボンと、先のとがった赤靴をはいている。「荷物をとつてきてくれたまえ、ガルシア」

オープン・カーは立派なピアス・アロウ型で、金具はびかびかに磨きたてられ、タイヤには一點のよごれもなく、まつしろな座席のカバーは洗濯したてだつた。ブランドはそれを見て、いらした氣分を、いくぶんやわらげた。カベンが運ばれてくるあいだ、彼は道を開けて立つていた。背が高く、どつしりとしているが、輕度の猫背が目だち、鼻の下に深い皺をきざんだ面長の

血色のわるい顔には、部下に對するときの、あの曖昧な威嚴の表情をたたえている。

「お住いがお氣に召せばいいがと思つております」アルヴィンはしゃべりつづけた。「デニー氏は召使をつれて行つてしまわれましたが、わたくし全力をつくして、いい夫婦者を雇つておきました。ガルシア、これは運轉手兼執事でございますが——と聲を低くして——「特別の推薦狀を持つておりますし……細君のマグダレーナが優秀なコックでして」

ハリントン・ブランドは、うなずいてみせた。

「準備はできたかね」

「はあ、もうよろしうございます」とアルヴィンは、息を切らしながら大聲で答えた。

みんなは車に乗込んだ。車が動きだすと、新任の領事は、膝かけの下で息子のほそい汗ばんだ指をそつと握つたまま、あてもなく町のほうへ視線を走らせた。

あるいは心配していたほどいやな土地ではないかもしれない、と彼はちよつと希望を抱きながら考へた。空氣は清淨だし、衰えかかつた二月の陽光を浴びて、いま車がすべるように走つていく曲りくねつた海岸は、きれいな砂地になつてゐる。それに街燈の柱の間には遊歩道もあり、すこし見すばらしいが、花をつけたアカシアの木が植わつてゐる。廣場には、ポインシアナの眞紅の花の間から噴水があがり、新聞^{ラガセー}を讀んでいる老人たちの黒い姿の向うに、奏樂堂の剝^はけかつた金泥が光つていたり、古ぼけたバスが、乗客をおろしてゐたりして、到るところ、たのしげな生活があふれてゐた。例のピンク色の漆喰を塗つた教會の一對の圓屋根は、ちやうど乳房を上

に向けたやうで、中央の鐘樓は色瓦で葺かれ、その頂上に錆びた十字架が立つているが、その向いにちよつとした商店が一二軒と、青い縞の日除けのあるエル・チャントコという名の、まんざらでもなさそうな喫茶店があつた。そのカリエ^(大通)をさらに先へ行くと、港のそばにどつしりした商業地區があり、領事館はそこにあるのだと、デッカーが小聲で言つた。

しかし、いかん……すぐ手近かに、自分の仕事の中心になるべき埠頭が、だらけた元氣のない姿をしているのを、領事はまざまざと見せつけられた——これは半分死んだも同然ではないか。皮革類や肥料やコルク皮、オリーブ油やタラゴナ酢などの不活潑な貿易以外には、ここで動いているものは何もないように思われた。波止場には、二隻の漁船が碇泊しているだけで、そのほかは錆びた沿岸航路の汽船から、數人の水夫が、三頭の驢馬に原始的な滑車をつかつて、不景氣そうに樽をおろしているだけだつた。すると彼は、またしても以前の苦い氣持がのしかかつてきて、思わず顔をくもらせた。ヨーロッパの任地で十五年間も精勵恪勤したあげく、もう四十五にもなつているというのに、この自分はなぜ、いつたいなぜ、こんなさいはての地に赴任させられねばならないのか——勤続年數からすれば、當然もうパリとかローマとかロンドンとかの高位地位につく權利をえているはずの、自分ほどの才能と人格をもつてゐる人間が？ 過去十八ヵ月間、彼はノルマンディ沼澤地帯のアルヴィルに埋もれていたので、今度の轉任こそ、自分に正當な報酬をもたらししてくれるものと思つていた。ところが……サン・ホルへと……その上わるいことは、この前任者だつたテニーが、自分より三年も若輩だというのに、マドリードのレイトン・ペイリーの下の、一等領事に昇進したという情報までえているのだ……。

「ねえ、お父さま、ほら、きれいいやありませんか」

車が町を出て、銀色をしたユーカリ並木のあいだの曲りくねった急坂の砂道を登って行くと、ニコラスは眼をさまして興味をひかれ、頂上から見はらす景色を、はにかみがちに指さした。眼下には地中海が大きな曲線をえがいてひろがり、ほつそりした燈臺が、その灣の岩の岬に立つていて、その下には打寄せる波が白い飛沫をちらしている。はるか北には、巨大な山山が、ぼう々と青い霧のなかにその輪郭をかすかにあらわしている。空気には、鹽と芳ばしい草の、強烈で新鮮な匂がこもっていた。そして、すぐ前方の、眞珠色をしたシストの花でつまれた崖の頂上に、少しまとまりのない赤い屋根の邸宅が、高いミモザの林で道路からさえぎられるように立っていた。玄關の圓柱の上には、消えかかった文字で、「カサ・プレーサ」という名が讀まれた。

「坊つちやん、お氣に入りましたか？」アルヴィン・デッカーが、少年のほうへふり向いた。

それが何か、少し心配そうに返事を待っているような口調だったので、ニコラスは自分の新しい家というのはこれだな、と氣づいた。これまで、わずか九年間ほどのあいだに、何べんも土地をかえてきたので、ニコラスはものに驚くという能力を失つてしまつていた。ところが、この古めかしい變つた家は、そのさびしい場所といい、またその立派さといい、なんだか異常な魅力がありそうでならなかつた。領事も同じように考えていたらしく、車が軋りながら玄關までの砂利をしいた車道に入り、やがて車からおけると、評價するようなその鋭い眼は、次第に満足 of いろにやわらいで行つた。

邸宅は土地の黄色い砂岩でつくられたムーア風の様式だったが、いまは色あせて品のいい琥珀

色になつていた。ひろい柱廊^{ポーチ}玄關^{エントランス}があり、その張り出しになつた平たい屋根は、風雨にさらされて、朱にちかくなつた赤のタイルで葺^ふかされている。階上の窓は、すべてひろいバルコニーに向つて開かれており、そこには藤や葡萄^{ぶどう}の蔓^{つた}や、さてはリラやビスクテラの燃えあがるような若枝などが、ふんだんに繁つていた。左手の玉石をしいた前庭は、いつぱいの苔で緑が眼にしみ、厩舎や、そのほかの離れのほうへつづいている。庭園はその向うにひろがつていた。

「古いことは、古いです」と、アルヴィンは領事の顔を見ながら、いいわけでもするように言つた。「そろそろ修繕をしないといけません。それに、電氣がなくて、ガスだけです。しかし、テニー氏は、こんな邸に住めるとはありがたいと、いつもそう言つてらつしやいました。領事館の近くには、どうも適當な住宅がありませんし、ここは長期の借用契約をしておるものですから……家具もつきましてね……」

「うん」と領事は、簡単にそう言つただけだつた。

彼は肩を張つて、玄關の浅い階段を、開けはなれたドアのほうへ、大股に歩いて行つた。そこには、骨格のたくましい中年の女が、うやうやしく黒のドレスを着て、微笑しながら出迎えに出ていた。デッカーは、これがマグダレーナだと紹介した。

中は石をモザイクにしきつめた廣間で、天井が高く、ひやりとするようだが、一方に食堂、もう一方に兩開きのドアのついた客間があり、どの部屋もロココ風の調度で飾られていた。奥のほうに、黒ずんだ胡桃材^{くるみ}のひろい階段が、螺旋状についている。領事は疲れをわすれて、義務と權利をわきまえた人間らしく、おもい足をひきずつて階段をあがると、二階の部屋部屋をあらた

めてみる氣になつた。階上は、彼や息子や、またときたま訪ねてくるであろう客人だけでは、いきれぬほど部屋数があつたが、そういうことも、豊富かつ高尚な趣味をもつ人間にとつては、決してわるい氣持のするものではなかつた。彼はこの廣大な感じから、彫刻をほどこした衣裳簞笥や食器棚、綴織でおおわれた金色の椅子、ふさのついた呼鈴の引き手、色のあせたビロードのカーテンなどが、すつかり氣に入つた。長い廊下にしみわたつてゐる、少し埃くさい匂いさえ、氣持よく彼の鼻孔をくすぐつた。これなら重い行李が到着しても、藏書や陶器類や、さては長年にわたつて各地で買ひあつめた、古代武器のすばらしい蒐集などを入れる餘地も、十分にあるというものだ。

玄關にもどつてきたとき、領事がすつかり満足してゐるのをありありと見てとつて、アルヴィンの茶色の眼は、ほつとしたように輝いた。そして、まるで忠實な犬のように、元氣をとりもどして、なにかおほめの言葉でも待つ顔をした。

「デニー氏が出發されてから、あんまり時間がありませんでしたが、すつかり整頓してあると思いますけれど。わたくしベストをつくしたつもりでいます」

「そうだろうね」領事はやさしくそう答えたが、例の要領をえない表情はくずさなかつた。やたらに自分の部下をほめることによつて統率をはじめるとは、このほうがいいと思つてゐるのである。ほめることほど、きびしい訓練を容易に損うことはなく、馴れあふことの危険を、これほど速かに育くむことはない。のみならず、すでにもう、このびつたりからだに合つた服を着た、大人になりそこないの、神経質な青年は——その服も、腋の下のところが一カ所やぶつてゐる——

―社交的に無能力だと見抜いていたから、一定の距離をおくのが上策だと決めてしまつたのである。それに、アルヴィンが兩手で麥藁帽子をぐるぐる廻しながら、もう少しいてシェリー酒でも一杯勧められるのを待つてゐるやうにぐずぐずしていたので、ブランドは慇懃ながらきつぱりとした態度で、青年をドアのほうへみちびいた。

「明日、領事館で會うことになるからね、じゃ、デッカー君」

「承知いたしました」

「君はいつも、九時かつきりには、出勤しとるだろうね」

「はあ、もちろんです」アルヴィンは頸からうえを眞赤にしたまま、辭去しようとしたが、表の階段のところできずきずきしていると、ニコラスが訴えるやうに父の顔を見やつたので、思わず吃りながら言葉をかけずにはいられなかつた。「恐縮でございますが領事、わたくしのところへも、いちどご來駕くださいませんか。わたくしども、カリエ・エストラードのアパートに住んでおります。狭苦しいところですが、以前から、いい時代のアメリカ風にしようとして努めてきましたので」

領事は慇懃きわまる言葉でこれに應酬したが、アルヴィンが行つてしまうと、思わず唇をゆがめた。彼の國家への忠誠は、誰も疑うことができない。しかし彼は、ヨーロッパ文化によつて洗練され、磨きあげられた完全なコスモポリタンであり――世界の市民ではなかつたか。だから、アルヴィンの素朴な言葉で、微笑させられたとしても、驚くにはあたらないのである。

もう七時になつていた。と、主人の希望をぴたりと言ひあてたかのように、ガルシアが食事の用意のできたことを知らせにきた。大きな食堂には、すでに二つの席がしつらえてあつた。父と子は、ローソクを三つともした燭臺を間にして、彫刻のある長いテーブルの兩端に、それぞれ席をとつて、新居における最初の食事をはじめた。

はじめのうち領事は、自分だけのもの思ひと、ニコラスの疲勞に對する深い思ひやりに氣をとられて、ほとんど口もきかなかつた。しかし、料理が特別よくできていて、ガルシアの給仕も申分なく、うす暗くてひんやりした、天井の高い部屋の雰圍氣も、なかなか快適なので、次第に氣持がほぐれだし、日中ひどく彼を苦しめていた、いろいろな焦躁も、いつか拭うようになくなつていた。重い憂鬱な眼でガルシアの動作を追つていたが、それでも最後には、その無愛想な壁をとり除いた。

「君の名は、ガルシアといつたな」

「はあ、セニョール(旦那さま)」

「昔からずつとサン・ホルヘにいたのかね」

ガルシアは、ぐつと姿勢を正したが、無感動な顔は、すこしも變化を見せなかつた。一瞬ローソクの焰がゆらめいて、その無表情な眼にきらりと反射した。

「いいえ、旦那さま。わたくし、もつとずつと大きな町などにもおりました。それも、上流のおうちでしたが。このまえ勤めていましたのは、マドリードのデ・アオスタというお邸宅(やしや)でございます」

「デ・アオスタ侯爵夫人のところか」

「その分家でございます、セニョール」

ハリントン・ブランドは、そう聞くとうなずいてみせた。彼は自分を俗物スラッだとする非難には、いつもまつさに憤慨したものだ。が、社會の秩序なるものには、ひどく氣をつかうほうなので、いま自分の給仕をしているこの寡黙な人物が、いつてみれば貴族的な推薦狀を身につけているにしても、べつに不愉快にはならなかつたのである。

「コックの人には、あすの朝あうからと、いつといてくれ。うちの子は少しからだが弱いので、特別の食事が必要だから」ガルシアがお辭儀をして、音もなく出て行つてしまうと、彼はニコラスに向つて、満足げに言つた。「あれは優秀な男らしいよ」

「優秀」という言葉は、馬にも召使にも、いや彼の親友であるバリのアレヴィ教授にも使われる、領事の大好きな稱讃の言葉だつた。しかしニコラスは、これには父と同じ氣持をわけあうことができなかった。それというのも、最初ちらと横目で見たときから、この執事には、うまく説明できない妙に不愉快な感じを、彼の胸中にひきおこしたからだつた。

コーヒーを飲みおえると、領事は金のリビーター・ウォッチ(時間を報じて鳴る懐中時計)を意味ありげに見た。しかし、この家の刺戟的な珍しさに、さつきから胸をわくわくさせられていたニコラスは、二階へあがつてしまふまゝに、ぜひ庭をひとめぐりしてきたいと言いだしたので、父親もいいなりにそれをゆるした。

外に出ると少年は、ちよつとした風邪でも引くことのないように、ほそい肩を外套でくるんで、やわらかな香ばしい空気を、なんども深く吸込んだ。それは時空の意識をみんな忘れさせてしまふ、無限のかたから漂ってくるような空気がつた。頭のなかが旅行中の喧騒でまだががんとしていたが、彼は自分にも庭園にもひたひたと押しよせてくる、暮れなずむ夕べの平和を感じた。庭園は、思つていたよりもずっと大きくて、すばらしくたくさん植物がしげつていた。玄關からだらだらおりになつてゐる小徑は、薔薇の蔓を大きく這わしたバーゴラ（ツタや蔓をからませたアーチ）を三つぐぐるようになつてゐたが、その兩側の花壇のふちには、櫻草と大きな白い芍薬がふんだんに植えてある。左手には、ミルテと夾竹桃のしげみが、紅白とりませて、早くも満開の香りをはなつてゐる。庭園はその反対側で、もと芝生だつたらしい一種の牧草地になつて大きくひらけてゐた。そこには、大きなキササゲと樺柳（ギョウリウ）の美しい木が二本たつてゐた。それから、屋敷の境になつてゐる低い石垣と、木造の物置の向うに、ヒースのはえた岩だらけの荒地があつて、そこかしこに白い玉石や、刺だらけのサボテンや、深紅色のツツジの草叢などが散在してゐた。うしろのほうは月桂樹の木立で、厩舎や召使の部屋などがかくれるようになつてゐるが、正面は、土地がなだらかに低くなつており、いじけた杉林につづいて、ずっと海岸へと同じ平地になつてゐる。

父のそばに立つて、大地と、發芽する草の匂いに酔いしれながら、この美しい景色をずっと眺めわたしてゐるうち、急にニコラスは、なんだか胸さわぎのようなものを感じた。それは、いままで住んでゐたどの住居でも絶対に経験したことのない感じで、ここなら幸福になれるかもしれない——いや、きつと幸福になれるという沸きたつような確信だつた。ずっと下のほうから、は

げしくはあるが、やさしい磯浪の音が、溜息のようにきこえてきた。なんだかとてもうれしくなり、彼は涙を流すまいとして、じつと眼をとじた。愉しい期待から、胸がおのずとふくらんで、ほつと吐息のようなものが出た。

「きれいいやありません、お父さま？」と彼は、この瞬間を持續させたいばかりに、そうつぶやいた。

領事はわれにもあらず、顔をほころばせた。これは、ニコラス以外には、めつたに引きだすことのできない微笑である。彼もまた、庭園の魅力に無關心なわけではなく、ごたごたと並んでいる夾竹桃や、テニスが「伸びるにまかせた」ひよろ長いミモザの生垣に眼をやっていると、彼の考えは、いささか仰仰しくはあるが、開墾のこと、新しい植え込みのこと、造園工事のこと、刈込みのこと、そんなことに、おのずと飛んで行くのだつた。

「きれいになるかも知れんな」領事は子供のいうままに、賛成してみせた。「ただそれには庭師が要る。明日になったら、それも考えてみよう」

いつしよに家へ引返しながら、彼は息子の顔へやさしく眼をやつて、この庭園や、シエラ山脈と海とから吹いてくる、この澄んだ強い空氣が、子供に健康をもたらさないなどということは、あるまいと考えた。

彼はニコラスと自分のための寢室を、二階の正面の通路にカーテンをかけた隣りあわせの部屋にきめておいた。夜中に息子が自分を呼んだとき、好都合だからだつた。彼自身も眠りが浅くてひどい不眠症に苦しんでいた。それでも、いつも眼をはなさずに守つてやりたい愛情から、夜の